

Ⅱ 特別連載 Ⅱ

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

信州大学の活動報告



北村 明子  
(信州大学  
人文学部教授)

コンテンツポラリィダンス

民族舞踊から芸術身体表現への変遷

2022年9月15日〜10月5日、「さくらサイエンスプログラム」にて、エチオピア出身、アイルランド在住のダンサー・振付家、ミンテ・ウオーデ氏の招へいを行いました。

ミンテ氏との出会いは、21年4月、コロナ禍での、アイルランドとのオンライン国際協働舞台企画にて紹介を受け、オンライン上で振付を行い、コラボレーション映像作品を共に創作したことに始まります。エチオピアの伝統舞踊の技術と感性をもち、欧州でコンテンツポラリィダンスの領域でプロとして活躍するミンテ氏の素晴らしい個性と、創作に貪欲に挑んでいく姿勢には大変感銘を受けました。また自身のダンス・カンパニーを主宰し、その独自性について深く探究し、様々な方法論をリサーチ・考察している姿勢も非常に印象的でした。このような人材とは是非、対面でお会いし、日本との交流事業を実施したい、と考えたことが、今回の招へい事業に進めたきっかけでした。

① 今回のさくらサイエンスプログラムによる招へいは、国際的活動の可能性を広げ、独自のダンスシーンを展開している日本のダンサー、振付家や専門家と交流し、劇場などの公的機関の環境を視察することで、彼のアイルランドで行っているダンス活動をより活性化させていくための知見を深めてもらうことを目的としました。プログラム内容は大きく3つの内容を中心として構成しました。

① 日本のコンテンツポラリィダンスの独自性に触れ、ダンス作品のクリエイションを経験することで、日本／エチオピア／アイルランドの舞台芸術における文化交流を深める。また日本人ダンサーと作業を共にすることで、振付を捉えていく作業

プログラムスケジュール	1日目	東京着
	2日目	来日期間中の詳細についてミーティング
	3〜4日目	舞踏舞台芸術共同研究実施
	5日目	オンライン伝統芸能リサーチ
	6日目	視察(世田谷パブリックシアター) オンライン伝統芸能リサーチ
	8〜10日目	舞踏舞台芸術共同研究実施
	11日目	視察(東京芸術劇場)
	13日目	視察(森下スタジオ)
	14日目	オンラインレクチャー、ワークショップ
	15〜18日目	舞踏舞台芸術共同研究実施
	20日目	舞踏舞台芸術共同研究ワークショップ デモンストレーション
21日目	帰国	

② 方法について、互いに刺激を与え合う。日本の劇場や公的機関、ダンスに関わる専門家との交流により、地域社会でのダンス舞台作品の位置付けや意義を視察する。またエチオピア、アイルランドにおける、同じ問題意識について意見交換を行う。

③ 日本の伝統芸能や舞踊、儀礼に触れて、エチオピアの伝統舞踊とコンテンツポラリィダンスの現在を考えると同時に、世界の伝統舞踊と現代の身体表現について共に考察すること。

これらの方針からプログラムを組み、日本人ダンサーと様々な刺激を与え合い、ダンスクリエイションを共にし、最終段階として日本人とミンテ氏との共同作業によるダンス作品の成果発表を行う事業を企画しました。

長野県の伝統儀礼についてのリサーチは、コロナ禍の影響もあり、オンラインでクロージドにより、遠山郷霜月祭り、火祭りの保存会の方々のお話に触れました。また、信州大学の学生に向けては、エチオピアの伝統舞踊のレクチャー、および、デモンストレーションをオンデマンド映像配信により実施し、多くの学生がアフリカの生活文化に触れ、多くの学びを得ることができ、多様なフィードバックを得ることができました。

ダンスシーンを牽引する東京都内では、世田谷パブリックシアター、東京芸術劇場など、主要な劇場を視察し、地域社会における劇場



ミンテ・ウォーデ氏(前列中央)と日本人ダンサーら



舞踏舞台芸術共同研究

のダンスに、対話として、身体のコミュニケーションの開いたあり方から現代のダンスの可能性を強く感じるプレゼンテーションであった、など好評をいただきました。ミンテ氏から、このよう

の役割について、アイルランド、エチオピアとの違いや類似点などについて意見交換を行いました。  
また、ミンテ氏が日本人ダンサーやワークショップ参加者に対して、エチオピアの伝統舞踊のテクニクを提供し、それらがどのようにコンテンポラリーダンスの創作に生かされていくかについての共同研究を進めました。10月4日はその研究成果発表として、スタジオオアキタンツでワークショップ&プレゼンテーションを行いました。参加者、鑑賞者、専門家の方々からは、エチオピアの伝統舞踊の多様性とそれらの動きから発展していく

な集中期間による共同研究が対面で実施されたことに、深い感謝の言葉をいただきました。また、日本の都市文化を中心とする現代の舞踊に注がれる独創的なアイデアや、身体を讀み解く舞踊創作の姿勢に共感を覚え、また、地域ごとの土地の伝統文化の多様性に感銘を受けた旨、報告を受けております。科学技術振興機構(JST)からサイエンスプログラムの実施者の方々への大きな感謝をお送りするとともに、次世代にも、このようなプログラムの体験をしてもらいたいと感じ、継続と発展を心から願う、とのことでした。

### ●プログラム終了後の展開

同事業は招へい者がより広い視点にダンス活動を活性化させていく体験をすると同時に、日本人ダンサー側も、異なるバックグラウンドを持つ振付家・ダンサーとの共同作業を通して、伝統/現代舞踊の融合の可能性について、実践的思考を得る機会になることも狙いとしていました。舞踊のクリエイションにおいて、容易に共通認識を持ち得ない「他者」の存在は、新たなアプローチ方法に挑む、大変刺激的な学び合いの場となりました。エチオピアの伝統舞踊のレクチャー・デモンストレーション/ワークショップでは、生活文化に根ざした、社会に開かれた舞踊の役割に、ダンス経験のない参加者もリラックスして参加することができ、対話としてのダンスに、身体のコミュニケーションのあり方から、現代のダンス創作へと展開していく可能性を強く感じるワークショップ&プレゼンテーションであった、と大変好評をいただきました。今年1月、3月、再びミンテ・ウォーデ氏の招へいを決断し、さらなるコラボレーションを経て、質の高い舞踊舞台芸術作品を上演することが叶いました。生活文化から生まれる土地の芸能やそのディアスポラの現象を、現代の身体がどのように捉えられているのか、表現形式や文化、国籍、言語などの違いを超えた伝統と現在との関わりがいかにか可能か。このようなテーマのもと、グローバル化する社会の中で不透明になりがちな「土地の文化」を、歴史的・空間的に横断し、伝統文化の脈と未来へと切り開かれるダンスの創出を目標とした、国際共同プロジェクトの舞台作品「Echoes of Calling project -rainbow after-」(2023年3月10・12日、東京芸術劇場シアターイースト)では、10月の成果を進展させ、新たなコラボレーションを進めていきました。実践・理論を融合した共同研究は、大変充実した形で実施可能となり、高い評価を得ることができました。心から深く感謝申し上げます。

(写真は、いづれも大洞博靖氏提供)